

100周年 事業

100周年事業について

根岸森林公園新築トイレ設計コンペ

建築家 内藤廣 講演会

よこはま建築ひろば

シンポジウム

こどもワークショップ、関連イベント

横浜市こどもの美術展2022

こどもの絵画作品LEDビジョン投影

年表・タペストリー展示

学校建替え工事 出前授業

Instagram

よこはま建築フォトコンテスト

100周年事業について

横浜市の公共建築は、市民や関係団体のみなさまに支えられ、100周年を迎えることができました。「横浜市公共建築100周年事業」として、多くのみなさまに公共建築に対する親しみや愛着を一層高めていただくため、関係団体のみなさまと連携して、様々なイベント等を実施しました。

122

第4章
100周年事業



横浜市
公共建築
100周年
Yokohama
Public Architecture
100th Anniversary

ロゴマーク

デザイン：アスカコヤマックス株式会社

これから100年続く建築として建てられた横浜の公共建築のシンボルである、「横浜市役所新市庁舎」をモチーフに、2つの建物が重なって見えるような設計コンセプトを数字の「1」に見立て、100周年の「100」の数字となるアイディアを組み合わせたシンボルデザインです。

横浜市公共建築100周年事業		日時・期間	会場・メディア
ロゴマーク		[決定] 令和3年12月 [使用期間] 令和4年1月～令和5年3月	
設計コンペ		[公募開始] 令和4年4月1日 [設計案〆切] 令和4年7月15日 [公開ヒアリング] 令和4年8月22日 [結果発表] 令和4年9月1日	[公開ヒアリング] 関内ホール 大ホール
講演会 建築家 内藤廣「建築とまちづくり」		令和4年8月22日	関内ホール 大ホール
よこはま建築ひろば	シンポジウム 「これまで、これから、横浜らしく」	令和4年11月12日	3階 議会棟 多目的室
	こどもワークショップ ・折り紙建築ワークショップ ・工作!お家で使える延長コード作り ・とび出す建物に色をぬろう ・空間ワークショップ ・間伐材で作るオリジナルコースター ・建設重機・機械工具体験会		横浜 市役所 1階 アトリウム及び 北プラザ
関連イベント	31階からの景色を見よう	令和4年11月5日～12日	31階 レセプションルーム
	ナゾ解き!よこはま市役所アドベンチャー		市役所内各所
	デジタルスタンプラリー		横浜市役所及び周辺公共建築
	工事現場見学会「横浜市開港記念会館」	横浜市開港記念会館	
	ガス・電気設備展示	横浜市役所 1階 展示スペース	
横浜市こどもの美術展2022 こどもの絵画作品LEDビジョン投影		令和4年7月22日～31日 令和4年11月12日	横浜市民ギャラリー 横浜市役所 1階 アトリウム
年表・タペストリー展示		令和4年11月1日～30日	横浜市役所 2階 展示スペース
学校建替え工事 出前授業		令和4年11月15日、28日 令和5年2月14日	都岡小学校 汐見台小学校
Instagram		令和4年4月1日～	
フォトコンテスト		[応募期間] 令和4年11月11日～ 令和5年1月10日 [結果発表] 令和5年2月22日 [展示] 令和5年3月4日～31日	Instagramにて作品募集 [展示] 横浜市役所 2階 展示スペース (3月4日～24日) 1階 展示スペース (3月25日～31日)
記念誌『横浜市公共建築の100年』		[発行] 令和5年7月	横浜市ウェブサイトで公開

根岸森林公園新築トイレ設計コンペ

協力：一般社団法人 神奈川県建築士会、一般社団法人 神奈川県建築士事務所協会横浜支部、
公益社団法人 日本建築家協会関東甲信越支部神奈川地域会（JIA神奈川）、
一般社団法人 横浜市建築士事務所協会、横浜市建築設計協同組合

次世代の設計人材の発掘や 育成を目的に実施

根岸森林公園新築トイレ設計コンペは、学生を含めた40歳以下の若手設計者を対象として、次世代の設計人材の発掘や育成につながることを期待して実施しました。

対象の根岸森林公園は、戦後米軍に接収された時期もありましたが、接収解除後に、なだらかな地形を生かし、多くの樹木が植わった森林公園として開園しました。大きな芝生広場が魅力で、休日などは、多くの人がかつろいでおり、特に桜の時期などはとても賑わいます。この芝生広場に面した位置に、誰もが利用しやすく、周辺環境と調和したトイレを建築することで、利用者の利便性を高めるとともに、より魅力ある公園とすることを目指しました。

スケジュール

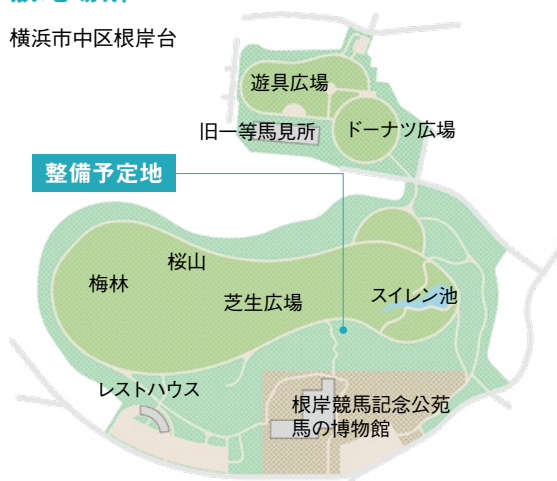
令和4年4月1日	実施要項公表
令和4年5月16日～5月27日	参加意向申出受付
令和4年7月1日～7月15日	設計案受付
令和4年7月28日	一次評価
令和4年8月4日	一次評価結果公表
令和4年8月22日	二次評価(公開ヒアリング)
令和4年9月1日	最終結果公表

敷地・計画条件

構造・階数	木造又は一部木造・地上1階建て
延べ面積	50㎡以下
構成	男子トイレ、女子トイレ、 バリアフリートイレ、掃除用具入れ
予定工事費	5,000万円以下で、実現可能な提案

敷地場所

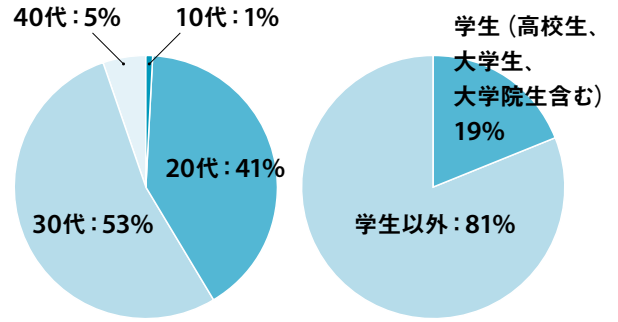
横浜市中区根岸台



応募者

267者から設計案が提出

参加意向申出書の提出が504者、設計案の提出が267者と非常に多くの方から応募がありました。応募者の年齢は、10代から40歳、所在地では、北は北海道、南は沖縄、また海外（ドイツ、中国）からと、幅広く応募がありました。



設計案提出者 (267者) 年代と学生の割合

評価委員

外部委員



小泉 雅生
[建築家/東京都立大学教授]



曾我部 昌史
[建築家/神奈川大学教授]



中川 エリカ
[建築家/中川エリカ建築設計事務所代表]

内部委員

藤田 辰一郎 [横浜市 環境創造局 公園緑地部長]
肥田 雄三 [横浜市 建築局 公共建築部長]

評価の着眼点

- 周辺環境と調和したデザイン
- 施設利用者の利便性や快適性
- 施設管理者の清掃・点検・維持保全等の管理全般への配慮
- 脱炭素社会の実現を踏まえた環境配慮
- ライフサイクルコスト

一次評価

非公開で評価委員が設計案（匿名）を、第1選考、第2選考、第3選考と、3段階で評価しました。

第1選考

5人の委員が各15票を投票し、56作品が得票。複数得票した作品に委員が推薦した作品を加えた、19作品を選出。

第2選考

対象とした19作品に、5人の委員が各5票投票し、15作品が得票。複数得票した作品に委員が推薦した作品を加えた、9作品を選出。

第3選考

対象とした9作品について委員が議論し、二次評価対象として5作品を選出。



二次評価（公開ヒアリング）

二次評価は関内ホール大ホールで、公開ヒアリングとして、応募者本人によるプレゼンテーションと、評価委員との質疑応答を実施しました。

応募者は、模型やパース、動画などを駆使し、設計案のコンセプトや特徴、公共建築に対する考えなどをアピールしました。また、評価委員から、作品の実現性やコスト、環境配慮や経年変化など様々な角度から質問していただきました。



全体講評

終了後に、評価委員から、横浜市を代表して肥田委員と、外部委員を代表して小泉委員から、設計コンペ全体の講評をいただきました。肥田委員は、「今回残った5者は周辺環境にしっかりと向きあっていた。この後の選定では、プレゼンテーションで実現性に関する不安をどれだけ払拭できていたかが議論されると思う。」と話し、小泉委員は、「縮退する社会が取り上げられる中で若手設計者の間にも閉塞感が漂っている。若手を対象としたコンペの実施はありがたい。各案が様々な新しい試みをしていて、コンペという機会をうまくつかっていた。参加者はこのコンペで経験したことを次の仕事につなげてほしい。」と話されました。



左：根岸森林公園新築トイレ
設計コンペ ホームページ/
右：根岸森林公園新築トイレ
設計コンペ公開ヒアリング動画



最優秀賞

丘の小道

張 昊、甘粕 敦彦

根岸森林公園の特徴である丘の起伏をなぞるような薄いアーチ状の大屋根と、トイレと公園をつなぐ草花ゾーンが特徴で、大屋根がトイレブースやベンチを緩やかにつなぎ、日射を遮りつつ風通しを確保しています。トイレへの動線は誰もがアクセスしやすいスロープで、使う人の気持ちを考えており、これから長く愛されることが期待できる、優しい印象の作品です。公園のランドスケープと連続した風景として魅力ある提案であること、実現性の高い提案であることが決め手となりました。

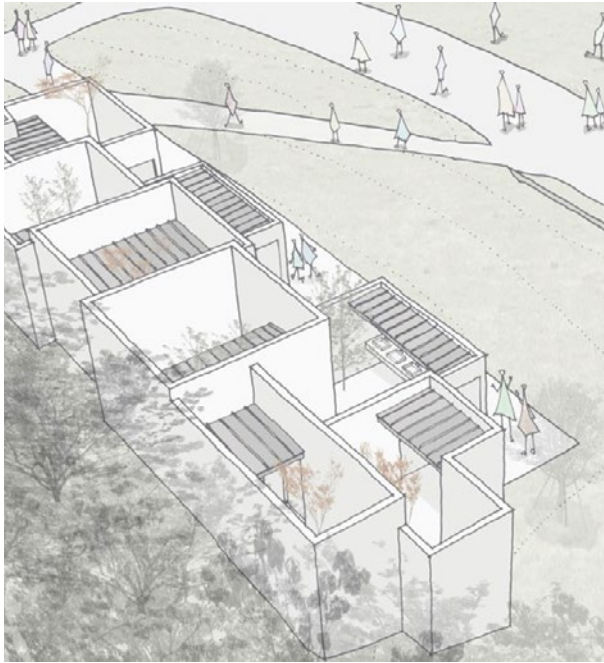
表彰式

令和4年11月12日「よこはま建築ひろば」シンポジウムの冒頭で表彰式を行い、最優秀賞を受賞した張氏、甘粕氏に、鶴澤建築局長から表彰状と記念品を授与しました。

張氏は「今回の案は、大きな自然や人のアクティビティなどと、建築が一体になったものを目指して設計した。これから建築の実現に向けて、多くのスタディ、多くの試作に取り組んでいきたい。」甘粕氏は「今回の案は、身近な福祉の視点や自然環境の視点を盛り込んだ案だと思っている。これからの建築に対して、様々な視点を持って、これからの公共建築のあり方も合わせて考えていきたい。」と受賞コメントをいただきました。



優秀賞



樹々を包み込むトイレ

山川 尚哉

トイレブースが広く、ブース内などに半屋外空間があり、トイレ内に樹木が植えられた開放的な空間が最大の特徴です。5作品の中で、唯一トイレブース自体の提案をしており、今後の公園トイレとして斬新な作品でした。

入賞

森林レストルーム

桐 圭佑

ベンチと一体となったおおらかな半月状の木製屋根が特徴的で、シンボリックでありつつも公園の風景に溶け込んだ作品です。



大地とつながる木レンガの風突トイレ

中倉 康介、増田 伸也

塔の形状でシンボル性を確保しつつ、塔の重力換気と蛇籠（じゃかご）の壁でトイレの臭いの問題を解決しようという案で、木材を多く使用した作品です。



木と土のパーゴラ

小野寺 匠吾

地面から屋根へと土壌がつながり、そこで繁茂した植物が人々の休息のための日陰を作り出す「地球とつながる建築」をテーマとした作品です。



佳作



公園の個室
神山 義浩



公園の回折
松村 耕、星安 康至、森 恵吾、張 婕



煉瓦とコンクリートと木と鉄骨の積層
山田 健太郎



公園のストラクチャー
山田 陽平、平川 凌成



丘に寄り添う とまり木テラス
山下 唯、中島 みづき



Responsive toilet
小山 浩太郎、清水 太幹、井上 岳、大重 雄暉



A Toilet for Everyone自分の好きなトイレを見つけられる場所
大久保 尚人



NEGISHI PARK STAND 根岸パークスタンド
横尾 周、林 恭正、小島 慎平、稲田 玲奈



大きな公園の小さな縁側
手嶋 恵佑、高橋 雅人



どんぐりの森と池
加藤 溪一、坂田 裕貴、marie

建築とまちづくり



内藤廣 [建築家／東京大学名誉教授]

令和4年8月22日、関内ホール大ホールにて、多くの公共建築や文化施設などを手掛ける建築家の内藤 廣氏を招き「建築とまちづくり」をテーマに講演会を開催しました。当日は約450名の方にご参加いただきました。以下、当日の講演会での内容を一部抜粋して紹介します。

昔の横浜

私と横浜の関係についてお話しします。私の生まれは横浜で、祖父が建てた屋敷がありました。戦争が終わってしばらくして祖父が亡くなり、屋敷を整理して5歳のときから鎌倉に住むこととなります。ただ、5歳ぐらいまでの記憶はいろいろ残っており、桜木町のあたりに連れて行かれると、アメリカの軍人さんがたくさんいて、地下道では傷痍軍人の方がアコーディオンを弾いて日銭を稼いでいるというような風景がまだたくさんありまし

た。横浜は大空襲があり、焼け野原から今日に至るということを、100年を振り返る上では忘れてはいけないと思います。よくここまでやってきたなあ、と思います。それから、当時本当にお金がなく、住宅政策とかいろいろなことをやれという声もあった中で「音楽堂を建てる、やっぱり文化だ。」と言った当時の知事さんは偉かったと思います。

中学1年から高校3年ぐらいまで、母がピアノをやっていたので、県立音楽堂にはよく通いました。なので、横浜は非常に近いものと感じています。不思議な魅

力があるというか、湿りけがあるというか、やっぱり港町なのかなと思います。

もう一つ、横浜で忘れられないことがあります。学生運動が一番すごい時に大学に入りましたが、授業も何もなかったので、アルバイトをしていました。横浜の石川町の前の運河にダルマ船が何艘も止まっていた、その中に設計事務所があり、アルバイト、といっても無給ですが、ダルマ船に泊まり込んで図面を描いたりしていたこともあります。長崎の軍艦島のブロックプランを描いた記憶があります。

横浜らしさ

「横浜らしさ」についてですが、神戸も長崎もそうですが、港町特有の、独特のバタ臭さというか不思議な臭いが漂っていると思います。私は、横浜は海外に開かれた場所であることをもって標榜してもいいと思います。例えば、外国人墓地があり、いろいろな海外との繋がりもありますので、横浜は「開かれた文化」、外国の方もどんどん受け入れて「グローバルに開かれた場所」というイメージが「横浜らしさ」であっていいと思います。「東京の喧騒からちょっと離れた開かれたまち」という感じが横浜の空気をつくっていくと思います。

これまでの公共建築

これまでの公共建築についてお話しします。司馬遼太郎さんが、

「建築っていうのは人を励ますためにあるのではないですか。」と言った。「人間、辛い時があったり、色んな時があるけれど、そういう時、まちを歩いたり、巷を歩く人たちを励ますためにあるんじゃないですか。そういうふうになっていますか。」と問いかけていました。私は、これまでの公共建築、これからの公共建築を考える上でそうあるべきだろうなと思いました。

三陸復興に深く関わりました。その中で出来上がってくる建物やまちが、本当に人を励ますものになっているだろうか、といつも自分自身にも問いかけてやってきました。三陸の話は単なる震災や津波からの復興というだけではなくて、日本あるいは建築家はこれまで、まちとどう向き合ってきたかが問われている話だと思います。建築にやれなかったこ

と、やれたこと、都市計画にできなかったこと、できたことを反芻する良い場所だと思っています。

建築とまちづくり

今日は「建築とまちづくり」というテーマなので、皆さんにぜひお話ししておきたいことがあります。横浜とは、みなとみらい線に関わることになりました。みなとみらい線の委員会の最初の時に、当時の横浜高速鉄道の社長で元国鉄総裁の高木文雄さんが「これからの駅は地域とともにあるべきだと思います。地域の空気を反映するような駅をぜひとも作っていただきたい。」と挨拶をされ、深々と頭を下げられました。そのときのことが忘れられなくて、その思いに応えようと地下鉄の駅を設計しました。



みなとみらい線馬車道駅<内藤廣建築設計事務所提供>

駅は究極の公共建築物

「駅は究極の公共建築物」だと思っています。要するに、まちの生き死にを担っていると思います。渋谷駅の乗降客数は、1日に300万人近くあるわけです。例えば県立の美術館とかは、年間20万人来たら嬉しいよね、となりますが、駅というのは全然オーダーが違います。それを考えると、馬車道駅も良いものをつくりたいと思い、取り組みました。地下鉄の空間として、こんなに余剰の大きな空間は、おそらく東京メトロでは不可能でしょう。ひょっとしたら日本で一番大きな余剰空間を持った地下空間が、みなとみらい線の馬車道駅だと思っています。そしてそれは、いろいろな方の努力で出来上がっています。

みなとみらい線の設計について

【天井のデザイン】真ん中のドーム状の空間にホールを作り、鉄道施設では初めて音響実験をやりました。段々になった天井をよく見ると、そこにアルミの調整板(吸音材)をはめ込んでいます。また、天井に貼ってあるGRC(ガラス繊維補強セメント)が全部雨樋になっており、通路に水を落とさないように設計しました。

【柱のデザイン】見通しをよくするため、通常の鉄道駅にある柱巻を全部剥がし、柱巻の中に納めるべき区画のシャッターレールや電設の材料を全てデザインしました。柱巻をなくして余裕が出た予算で外側の壁に無垢のレンガを使いました。

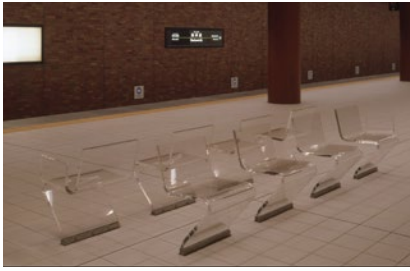
【ベンチのデザイン】駅構内の

ベンチを透明の強化アクリルで作りました。ものすごい数の実験をやりました。みなとみらい線ですべてやって以来、他の駅でこれに類するアクリルのベンチが出ましたが、みなとみらい線が初めての試みです。

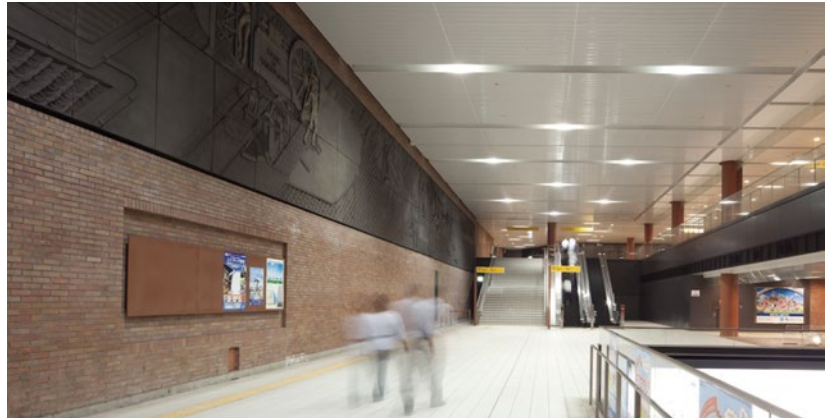
【壁面のデザイン】地下鉄の構内は非常に壁面が多いので、横浜で壊された建物のパーツを飾ることを構想していました。横浜銀行が曳家をするタイミングで、地下にある金庫扉などをもらい壁にかけました。特に横浜銀行の正面にあった大壁画「横浜開港史」も行き場所がなかったので、この地下鉄の駅で引き取り展示をしています。ブロンズではなく石膏でできていたため、列車振動などで壊さないよう、保存会の方と一緒に気をつけてすすめました。



みなとみらい線馬車道駅中央にあるドーム状のホール。天井には音響や雨漏りに配慮した材料を使用している。(内藤廣建築設計事務所提供)



左：強化アクリルを使用したベンチ。鉄道駅では初の試み／右：見通しの良い駅構内。レンガ壁には大壁画「横浜開港史」が展示されている。(内藤廣建築設計事務所提供)



日向市の事例 「溜まりコンセプト」

私が宮崎県の日向市に関わって27年、いまだに付き合いがあります。「建築とまちづくり」という意味で喋るのはいいかなと思ひ、日向市の話をしさをさせていただきます。日向市では鉄道高架の事業からまちづくりにも関わりました。まちづくりについて、10年20年未来のことを語るなら主役は子どもだね、ということで、小学校でワークショップをやりました。小学校の子どもたちが議論して、模型を作ったりしました。本当に勉強になります。第2弾をやろうということになり、日向市は杉の集積地で賑わったので、杉を使って大工さん

も巻き込んで、子どもたちの提案を実際に作っちゃおうと、みんなで議論して模型を作りました。最後は、大工さんのサポートもありましたが、子どもたちが案の中から実際に屋台を作りました。今でも祭りのときにいろいろ使っています。何より嬉しいのは、市役所の人から電話があって、就職の募集期間に、このときの子どもが「市役所の職員になりたい、まちづくりやりたい。」と市役所に来ました、と言っていました。まちづくりをやるのだったら、小学校の高学年から中学生ぐらいを大事にするのが早道なのかなと最近では思っています。その後は、中学校でもワークショップをやり、中学生からも全く我々の思っていな

い答えが返ってきたりしました。まちづくりには、いろいろな人が集まってきます。地元の建築士会の青年部の方にも出てもらい、駅の駐車場の管理棟を、彼らが考えて作ることにになりました。ここに「陽だまり・風だまり・緑だまり・水だまり・人だまり」と書いてあるのですが、彼らが日向のまちに必要なものはこういうことだ、と考えたコンセプトです。私は、これは素晴らしいと思っています。建物がそれぞれ大きさでなくてもいいから、ちっちゃい「たまり」を持つということ、日向のまちづくりの構造にしてもいいじゃないか、という話です。横浜でも使えると思います。いろいろなところでまちづくりの話をするときに、彼らのこの



宮崎県日向市の建築士会青年部の若者が考えた「溜まりコンセプト」と駅駐車場の管理棟(内藤廣建築設計事務所提供)

山口県周南市の駅舎。まちの広場側は全面ガラス張りとなっており、まちに対して開かれた空間となっている。(内藤廣建築設計事務所提供)



コンセプトをできるだけ言うようにしています。私は何か全国のみちが、あるいは建築家がこういうことを目指したならば、まちはずいぶん良くなるはずだと思っています。横浜の馬車道でも元町でもそうになっています。まちに対して建築がちょっと引くと、そこに人だまりや、ちょっとした「たまり」が出来るというのは、似ているところがあるなと思います。

驚くべきことに、どこも人口減少と高齢化で乗降客数が減っていく中で、日向市駅だけは乗降客数が伸びています。やっぱり、まちづくりって一生懸命やるものなんだろうな、と思いました。横浜もいろいろなまちがありますけれども、まちづくりを一生懸命やったまちっていうのは人も寄ってくるのだと思います。

周南市の事例 「場所のニーズ」

山口県の周南市の駅についてもお話しします。建て替えることになって提案をしました。これは駅というよりも駅ビルですね。建て替える前のビルはなかなか良かったと思っています。そ

れは戦後、いわゆる自治体側が国鉄に要望して建てた民衆駅で、ビル自体は使い勝手が悪くてボロボロだったけど、市民がいろんな形で使っていて、その風景はとてもよかったです。ここでも、ワークショップをやって、高校生の学生たちを集めていろいろ聞きました。駅に何があったらいいって聞いたら、シャワー室が欲しいと言うんです。彼らは学校の授業が終わって部活やって、そこから塾に行くんですね。つまり、部活やって汗だくになって塾に行く、その駅にシャワー室があったらシャワー浴びて塾に行けるという訳です。彼らのライフスタイルが見えて、それがとても面白かったです。建築の計画をやっていて気がつかないような話がたくさんあります。ひょっとしたらこれからの公共建築は、いわゆる計画学的に見えているものではなく、そういうものを拾っていかなきゃいけないと思います。直接聞かないと分からない。その「場所のニーズ」みたいなものとちゃんとシンクロした場合に、公共建築はものすごく生きるということです。

これからの公共建築

これからは、建築っていうのが一体何なのか、ということが問われます。一昔に比べると建築を作り上げる上で、経済的な圧力はかなり高まっている気がします。建てにくい時代に移りつつあります。つまり「ちゃんと考えて、ちゃんとつくる」ということをしっかりと考えるべき時期に来ているのではないかなと思います。

横浜といえば、キングとクイーンとジャックがある。県立音楽堂もある。我々は、立派なホールや公共建築物を作ってきたけれど、これまでの100年の中で、本当に後世に残せるもの、誇れるようなものを作ってこられたのか、一度考えた方がいいと思います。結局、愛されない建物は残らないと思います。100年にわたって愛される建物をつくれるかどうかということは、建築家の大テーマです。ちょっと面白くて拍手喝采でメディアに出て、大騒ぎになって、すぐみんな忘れるみたいな建物はあるかもしれないけれど、100年にわたって人に愛され続けるような価値

みたいなものを公共建築は本当につくれるのか。今まで横浜はつくれてきたのか、と検証した方がいい。

昔「つまらなくて価値のあるもの」っていう文章を書いたことがあります。面白くて価値のないものがたくさんある。例えば、お笑い芸の一発芸みたいなものは一瞬面白いけれども何も残らないみたいな。建築も同じで、面白くて価値のないものにあふれているように見えたんですね。じゃあその逆ってなんだろう。「つまらなくて価値のあるもの」っていうのはないか、ということ考えた時期があります。例えば使い込んだ道具があって、その人が本当に使い込んだ道具っていうのは私にとっては何の価値もないかもしれないけれど、その人にとっては、その道

具の手触りだとか、そういうものは価値がありますよね。私は、建築も、そのようになる素質を持った建築がつかれないかなと思うんです。

私はこれからの教育や公共建築がどうあるべきかと問われたならば、「社会的共通資本」の話をもっと前面に出してもいいと思います。つまりインフラのことです。みんなから愛されるような建築ならば、鉄道や道路や港湾などと同じように、社会的なインフラの一つだと言っても良いと思います。文化を担うような建築も「社会的共通資本」の一部だと言ってもいい。横浜市が公共建築を建てる際に、100年後、200年後に残す、公共建築は社会的なインフラだという共通認識を持った方がいいと思います。

内藤 廣

[建築家/東京大学名誉教授]

1950年横浜市生まれ。1976年早稲田大学大学院修了。フェルナンド・イゲラス建築設計事務所、菊竹清訓建築設計事務所を経て1981年内藤廣建築設計事務所設立。2001～11年東京大学大学院にて教授、副学長を歴任。2011年～同大学名誉教授。また、2022年4月からは公益財団法人日本デザイン振興会会長を務める。主な建築作品に、海の博物館、みなとみらい線馬車道駅、島根県芸術文化センター、高田松原津波復興祈念公園国営追悼・祈念施設、東京メトロ銀座線渋谷駅など。



クロストーク

内藤廣 [建築家/東京大学名誉教授]、小泉雅生 [建築家/東京都立大学教授]、
曾我部昌史 [建築家/神奈川大学教授]、中川エリカ [建築家/中川エリカ建築設計事務所代表]

内藤——この後のコンペ*の評価委員の小泉さんと曾我部さんと中川さんがいらっしゃるの、少しお話を伺いたいと思います。まずは小泉さん、いかがでしょうか。

小泉——僕は「社会的共通資本」という言葉が非常に重く響きました。公共建築は、今だどうしてもコスト、説明責任、法令遵守といったところが前面に出てくるケースが多いです。多くの人々がいろいろな恩恵をこうむる共通資本だと考えたときにもう一度、その建築のあり方が、ただ安きゃいいのか、そうじゃない

だろう、というような姿勢が必要ではないか、と改めて思いました。それがないと僕らの生活は成り立たない、そういう姿勢で我々も作っていくことが大事だと思いました。

内藤——曾我部さんはいかがですか。

曾我部——僕も「社会的共通資本」の話は重い話題として関心を持ちましたし、建築に愛着をどのように持っているか、そういう余地を残すか。という考え方にはっとさせられました。公共建築というと、行政の方で必要な建築、施設はこういうものであろうと予想した上で、それを達成するよう頑張ってきたと思うのですが、地域の人たちが、あるいは地域の子どもたちが欲しいと思うものをどういうものをきちんと把握した上でそれを実現してあげるのが公共建築、と変わってくるとすると、行

政側の公共建築を実現するスタンスそのものにも大きな変革が期待されるということなのかな、と思ってお聞きました。併せて、建築家としての我々の活動のタイプも、それに合わせていろいろ変わっていかざるを得ないのかな、と思いました。

内藤——曾我部さんは三陸に関わっていましたが、三陸での公共建築のあり方みたいところはどうですか。

曾我部——難しいですね。私が関わったところでは、なるべく地域の方々の声を取り入れた建築にしようという努力はしましたが、そうならない機会の方が多かったようにも思います。あれだけのことがあっても、やはり行政が主導で何かを実現していくこと自体は、あまり揺るがなかったんじゃないかなという気がしています。



内藤——例えば、たくさんのワークショップをやったりしていましたが、それまでそういうことをあんまり習慣として持っていなかった人たちがいきなりやったって無理だよ、というのもありました。行政の塩梅だってあるし。むしろ、日常からああいうことを年中やっとくべきだったと思いました。そこで民主主義的な回路を入れていくことが非常時にも役立つんだ、というある種の予行演習みたいに捉えて、日常からワークショップ的な活動をやらいいのかな、と思いました。中川さんはいかがでしょう。

中川——ワークショップというのは、よりよく生きるための知恵を集める行いだと思っています。内藤さんがおっしゃるように、非常時の予行演習もかねて、その場に生きる方々の声を日頃から集めておくというのはとても素晴らしいですね。

「建築とまちづくり」というテーマは、世代によって向き合い方に差が出るテーマではないでしょうか。内藤さんの世代と、私たちの世代では、おそらく実践の仕方が違う。お話



のあった 3.11の震災はちょうど、社会に出てすぐの頃でした。日常を見直して、小さいことを長い年月をかけて壮大に繋ぎ、積み重ねていくことに興味を持っている人も多い世代です。私たちの世代だからこそ発することのできるメッセージはどんなものだろう?と思いを巡らせながら、今日のお話を伺いました。

内藤——若い世代の方の意見は良いですね。中川さんのお話に応えると、この国は長く厳しい局面が続くのではないかと考えています。それは環境的な意味や、災害という話も含めて、あまり楽観的には見れません。そのときに、何か建築が人々の心を支える、ちょっとお役に立てるみたいな話は、必ずあると思っています。私はそこに希望を託せるような対象として、建築はありうらと思うのです。これからいろんなことがあるでしょう。今まで100年やってきて、でもこれからの100年は、いろいろなことがあるだろうけれど、人々の心の支えになるような公共建築がまち中に幾つもあれば、それは必ず人々の心の支えになると思います。横浜市の方には、ぜひそういう建物を作っていただきたい。

それから、まったく新しいまちづくりのロジックも出てくる可能性もあり、ひょっとしたらメタバースみたいなので、バーチャル横浜みたいなものを見ながら、どういうふう建物を作ったらいいかみみたいな話だって出



てくるかもしれない。でも、やっぱり最後は物なので。どれほどバーチャルの世界が広がっても、やっぱり最後は、人が頼りになるのは我が身の置き所ですね。そこが大事になると思いますので、そういうハードウェアとしての建築が最後の砦になるはずだから、横浜は東京では成り立たない、横浜の「アイデンティティ」みたいなものをぜひとも確立していただきたいなと思います。それが必ず、人の支えになると思っています。

※令和4年8月22日同日、講演会の後に根岸森林公園新築トイレ設計コンペの公開2次評価が行われた。詳しくは第4章「根岸森林公園新築トイレ設計コンペ」を参照

小泉 雅生
[建築家、東京都立大学教授]

曾我部 昌史
[建築家、神奈川大学教授]

中川 エリカ
[建築家、中川エリカ建築設計事務所代表]



建築家 内藤 廣 講演会
「建築とまちづくり」動画

これまでも、これからも、横浜らしく

ファシリテーター：山家 京子 [神奈川大学教授]、パネリスト：小泉雅生 [建築家/東京都立大学大学院教授/小泉アトリエ主宰]、乾 久美子 [建築家/横浜国立大学教授/乾久美子建築設計事務所主宰]、五十嵐 太郎 [建築史・建築批評家/東北大学大学院教授]、肥田 雄三 [横浜市建築局公共建築部長]
協力：一般社団法人 横浜建設業協会、横浜市建築設計協同組合

令和4年11月12日、「よこはま建築ひろば シンポジウム」を、横浜市役所3階議会棟多目的室で開催しました。建築のプロフェッショナルにご登壇いただき、各登壇者から活動についてプレゼンテーションしていただいた後、「これまでも、これからも、横浜らしく」をテーマに、ディスカッションいただきました。当日は約110人の方にご参加いただきました。以下、当日の内容を一部抜粋して紹介します。

横浜らしさ

山家——イントロダクションとして、「横浜らしさ」についてパネリストの皆さんにお伺いします。「横浜らしさ」はいろいろあると思いますが、空間的特徴や建築の特徴など、それぞれがイメージするところをお話しいただければと思います。まずは、五十嵐さんからお願いできますか。

五十嵐——あくまでも僕の世代で個人的な体験からですが、自分が建築史の研究室出身だったので、大正とか昭和に西洋の様式のデザインが入ったタイプがよく残っている街として認識しました。残った建物も転用されて再

活用されているというのが、自分の中では大きな横浜のイメージです。

横浜博覧会 (YES'89) のときには、横浜美術館が「みなとみらい」にほとんど何も無いときにポツンと公共建築として建っていて、それが妙に未来的だなと思った記憶があります。公共建築ではないですが、ランドマークタワーも当時日本で一番高い建築で、すごく未来的なイメージでした。また、自分が批評の文章を新聞で書くようになった最初は、大さん橋ターミナルだったので、先端的な建築が登場する街だと思いました。だからちょっと過去と未来の両方の面がありますね。

もう一つは、個人的にも付き合いがあったBankART。代表の池田修さんが今年亡くなりましたが、建築とアートを繋げて盛り上げていくことをずっとやられていたので、僕の中ではとても印象が強いです。

ちょっとトリッキーな言い方ですけど、コロナ前に上海に行って、新しい建築がすごい元気で、未来的な建築が増え、なおかつ現代アートがすごい盛んです。なので上海を見て「横浜らしいな」って、ちょっと思いました。

山家——最後の上海に「横浜らしさ」を感じるというのは非常に面白いご意見だなと思いました。続いて乾さんお願いします。

「先進的である」ことが、「横浜らしさ」のキーワードになりそうです。

乾——横浜国立大学に行くようになって7年目ですが、それまで観光で時々来るぐらいで、そこまでイメージはありませんでした。

ただ建築や都市を勉強する中で、都市デザイン室がある市で街作りをしっかりやっておられることや、「みなとみらい」や創造都市という政策など、非常に先進的な試みを積極的にやっているというイメージを持っていました。

その後、横国に通うようになり、建築学科の学生がいろいろな敷地でいろいろな課題を見つけて、プロジェクトを考えるのですが、彼らが見つけてくる場所は都市部ではなく、どちらかといえば郊外が多いのです。

そうしたプロジェクトを指導する中で、臨海部以外が非常に広大で、課題と魅力が結構あるということがよく分かってきて「臨海部ではない横浜らしさ」も考えるといいんだろうなと思っています。

山家——学生を通して見る、発見する横浜、というのは私も常日頃感じております。小泉さんいかがでしょうか。

小泉——僕もちょっとトリックキーな言い方をすると「横浜らしさ」って、やっぱり東京との関係を抜きには語れない気がします。だから「横浜らしさ」って「東京とは違うぞ」という、そこに尽きるんじゃないかという気がしています。東京の近郊にあって、でも、東京とは違う歴史的・文化的な背景を持っていて、ポテンシャル

もある。だとすると東京とは違う街の作り方、街のあり方を指すべきじゃないかと。それが「横浜らしさ」という気もしています。やはり東京が経済、あるいは政治の中心であって、そこである種のスタンダードが決められていくという流れがあるにせよ、横浜は、そことはちょっと距離を置いて、ちょっと違うんだぞっていうのを言い続けていくことが大事なんじゃないか。そこそが何か「横浜らしさ」に繋がるんじゃないか、と思ったりしています。横浜って、そういう意味で、都会というより「大きな田舎」なのではないかという気がしています。大きくなりつつも田舎であり続けるというか、それをどうしたらいいのかを模索していくというのが一つの横浜のキーなのかとも思っています。

肥田——「横浜らしさ」について私からも。

私は東京生まれで、就職で横浜に来て30年位です。最初来たときに思ったのは、進取の気性、何か新しいことに積極的に取り組むところが横浜の気質なのかなと思っていたんです。ですが、最近それが残っているのかと言われると、どうだろう、という感じもちょっとしています。新しいことにチャレンジする気質がだんだん失われてきているというのは、反省として思ってい

るところです。

山家——「横浜らしさ」を今後どう考えていくかというのが、このセッションの課題だと思います。まず「先進的である」ことがキーワードになりそうです。また、都市デザインが地域空間資源、はっきり言うと「観光資源」として人が呼べるというのは、なかなか他の都市にはないような気がします。都市空間の魅力だけで十分に人を惹きつけるというのは、今後大事にしたいところだと考えています。



公共建築のあり方

山家——続きまして、「公共建築のあり方」についてです。公共建築は、今回のメインテーマでもあります。100年のパースペクティブでみますと、大きく社会が変わってきています。100年前と比べますと、あるいは2000年代ぐらいに遡るだけでも、求められる公共建築のあり方は変わってきている気がします。その辺りの「社会課題と求められる

公共建築」について、五十嵐さんは多くの著述があります。歴史的に担ってきた役割も含め、少しお話しただけでないでしょうか。

五十嵐——横浜に限らないですが、公共建築の2000年代以降の流れで、ものすごく変わったと思うのは、ワークショップとか、住民の意見を設計のプロセスに入れるタイプの作品が増えました。建築家が、一方的に形と空間を与えていたものが、2000年代の途中ぐらいから公共建築の作り方が劇的に変わって、その上で高い評価を得ている建築が増えていきます。

少し「らしさ」を補足すると、JIA東北支部の東北住宅大賞の審査員を10年間ぐらい、古谷誠章さん（早稲田大学）とやっついて、評価項目に「東北らしさ」というのがあります。これは企画しているJIAが入れているのですが、いつも困るのです。東北らしさってなんだろう、と考えることには意味があるけど、これが東北らしさと決めてしまうのはちょっと違うと思います。「問いを続けることには意味がある」とは思うのですが。どうしても「なんとからしさ」となると、それは枠に入るけど、これは入らないって排他的になる。建築でも言えることで、みんな考えるべ々な「横浜らしさ」だけではなく

て、それこそ乾さんが学生とのいろいろな話の中で発見していくように「何か、これも横浜らしさではないか」みたいな、そういう「発見的なもの」が建築のプロジェクトを通じて出てくるとすれば、凄くいいなと思いました。

乾——求められる公共建築ですが、例えば地方都市に行くと、商店街も完全にシャッター街化していたり、中心市街地にほとんど人がいなかったりなど、誰が見ても明らかな問題がある状況かと思います。そうした中で公共建築が起死回生のチャンスとして、非常に強く求められていて、それを失敗しちゃいけない、という使命感とともに建てられるようなことがあると思います。失敗しないためには、「やっぱり住民に話を聞かなければいかん」という思考回路があって、五十嵐さんがおっしゃられたみたいに、市民の意見を丁寧に吸い上げて、ちゃんと反映していくようなプロセスを重視するプロジェクトが実際に増えていると思います。

小泉——プロセスを重視していくと、だんだん説明できないものは実現できない、説明しにくいものは避けるみたいな方向に行くんですね。でも一方で、やっぱり説明し難い魅力みたいなものってあると思うのです。そ

れを建築の中でどう拾っていくのか考えていかないと、だんだん説明はしやすいけど、でもなんとなく魅力ないよねって。それで、長い歴史に耐えるような公共建築、あるいは長く愛されるような、住民のシビックプライドを醸成するような建築が、あるいは街並みができるだろうか、ということが結構悩ましいと思っています。

五十嵐——説明が今強く求められるけれど、説明できない価値もある。例えば仮に、たった今パーフェクトに説明できても、それは10年後20年後同じかというと、どんどん状況が変わっています。ベストフィットというよりは、ある種の「冗長性」というか、少し状況が変わっても対応できるような何か余剰なものを抱えている方が、長期的には可能性があると思うんです。今作っているものが100年後に残るかどうか、その可能性を考えたいなという感じはありますね。



ある種の「冗長性」というか、少し状況が変わっても対応できるような何か余剰なものを抱えている方が、長期的には可能性があると思うんです。

市民の方がただコストだけじゃなくて、俺たちの居場所をもうちょっとちゃんと作ってくれよ、って言えばいいわけですよ。

山家——「冗長性」は都市のレジリエンスを考えるときにも、非常に大事なキーワードです。社会課題の変容と求められる公共建築を考えるときの一つのキーワードかな、と実は私も考えていました。公共建築が建てられるようになった頃は、小学校といえは小学校、病院といえは病院といったように、ビルディングタイプが明確にあったんだと思います。それが複合化されたり、人々が居場所を求めるようになって、その公共建築が持っているビルディングタイプの機能を満たすだけではフィットしなくなってきた。つまり、空間の質や冗長性が求められるようになってきているんだと思います。

肥田——今の点について、居場所だったり、ちょっとした余裕、それが長持ちするとか、長く愛されるということ、今の時代はそういう居場所が求められていること、これらを市役所内部でどう説明していくのか、我々が課題として持っています。税金を納めている人全員に対して、こういった余裕が必要ですよということを説明できないといけないと思うのですが、なかなかできていないのが実情かもしれません。

乾——我々建築設計をやっている人間は、複合化に可能性を見出ししているように思います。思

わぬ組み合わせがなぜか居場所になってしまう偶然性みたいなものを、複合化によって副次的に得ることができるのではないかと期待しているのです。だから居場所を作ることが必ずしも面積を必要としないのかと思います。

小泉——先ほどの肥田さんの話を受けると、最終的な意味合いでの発注者である「市民のリテラシー」を高めていくことではないかという気はします。

今、市民と対話をするプロセスが徐々に定着しつつある中で、市民の方がただコストだけじゃなくて、俺たちの居場所をもうちょっとちゃんと作ってくれよ、って言えばいいわけですよ。市民の建築に対するリテラシーを高めていくことも、遠回りのようで大事な気がします。



設計のプロセス

山家——今の小泉さんのお話や五十嵐さんの住民参加のお話

でも、公共建築事業あるいは設計のプロセスについても触れられていました。そのあたりについて、乾さん小泉さんいかがでしょうか。

小泉——僕が先ほど寿町のプロジェクトを紹介しましたが、僕らが常識と思っていることと違うことを対話で言われることがあります。建築計画とか建築学の中でセオリーみたいなものがあるのですが、実際はそれとは違うことが多々あって、使う人間が介在して初めて明らかになる事実みたいなものがいっぱいあるわけですよ。それは対話を通じてしか分からないことなので、そういう意味では「対話をしていく流れは間違いない」という気はしています。

乾——私も思わぬ発見を期待してワークショップをやっています。自分で解答を作ってワークショップに臨むと、だいたい大失敗して、面白い意見が聞けないというふうになります。このプロジェクトがどうなってもいいから、皆さんが何を考えているか聞きに行こうという感じで行ったワークショップは、創造的になっていくというか、面白い意見がどんどん出てくるというのはあるかと思っています。先ほど五十嵐さんの市民ワークショップを通して作る建築が歴史に残るのか問題です

けれど、もし残るとするならば、意見によって生まれた「奇妙な集合知」みたいなものが形になれば、それは現代のある姿として、歴史に残るんじゃないかなという期待感があります。



肥田——私もワークショップを以前やったことがあります、あまりうまくいかなかった思いが強いです。市役所側から見ると、最大公約数にしかなくていけない、いろんな人からいろんな意見を聞いて皆さんの意見を全部反映させると、それはできない、みたいなことになっていて、あまりいいものが生まれえないイメージがまだ残っています。

山家——その辺が、先ほどの乾さんの「奇妙な集合知」というところに含まれているのかなと思いました。肥田さんがおっしゃる、最大公約数的な、あるいはワークショップのうまくいかない感じというのは街づくりの現場で日々体験していますので、よく理解できます。

これからの「横浜らしい」公共建築

山家——「横浜らしさ」と「公共建築のあり方」についてお話をいただきましたが、最後に「これからの横浜らしい公共建築のあり方」について、一言ずつお願いします。

五十嵐——ワークショップを通じた建築、すでに建築学会賞で高く評価され、いくつか受賞している、歴史に残るような物というのは出てきていると思います。建築の世界だと大さん橋ターミナルは、90年代になってコンピューターが設計に導入されるようになって、一つの成果としてああいう形が出来るということで高く評価されていますが、多分そんなこと関係なしに、上のデッキの部分で、自由に楽しんでいる人を見てると、それとは別の価値というか、気持ちのいい場所として成立している。そういう建物をもっと横浜で増やしていただきたいなと思います。

乾——「横浜らしさ」と「これからの横浜らしい公共建築のあり方」ということで、建築がどこまで関わられるか分からないですけども、横浜というのは、複雑な地形の丘陵地が急速に都市化した場所が多い。高低差が激しく、交通的にも弱い所が高齢化を迎えて

厳しいところも多いと思っています。それをどうやって未来の街へ変えていけるのか、ということに対して、横浜市のような大きな自治体に取り組むことで、突破口を開いてほしいと思います。「横浜らしい」というのが、郊外にも明確なイメージとともに感じられるようなものになると素晴らしいのではないかと想像しています。

山家——私の研究室では、郊外住宅地のまちづくりをお手伝いする機会があるんですが、横浜の郊外にも課題を抱えているところがあります。個人や地域でやれることももちろんありますが、空間整備など公共に期待されることも多くあるように感じています。

小泉——僕は横浜へのエールというか、常識にとらわれず、チャレンジし続ける街であって欲しいなと思います。そのためには、行政が頑張る部分もある一方で、住民の意識が変わっていく、変えていくことも大事な、という気がしています。そういう意味では、横浜は行政体の規模が大きい分、住民と行政との距離が少し出来始めてしまっているのではないかな。だから、住民と行政と一緒にやっていけば、常識というものを超えていく一つの手がかりになるのではないかなという気がしています。

意見によって生まれた「奇妙な集合知」みたいなものが形になれば、それは現代のある姿として、歴史に残るんじゃないかなという期待感があります。

良い建築、人々の心の支えになる 公共建築を作っていきたいと思います。

肥田——「良い公共建築を作っていきたい」、「今回を機に色々考えていきたい」という思いで参加しましたが、小泉さんがおっしゃるように「常識にとらわれずに」というところは、確かにそのとおりだと思いますし「公共だけじゃなくて市民と一緒に」というところが、とても参考になりました。そこをしっかりとってかなきゃいけないと思っております。

山家——ここで簡単にまとめさせていただきます。最初に、「横浜らしさ」について、「先見的、先取である」とか、「東京とは違う横浜の立ち位置」といったお話がありました。そうした中で「らしさというのは発見するものである」という重要な指摘もありました。横浜の大さん橋のお話が出ましたけれど、「横浜らしさ」を追求するだけでなく、「新しいものを付け加えていくこと、それも横浜らしさ」と思ってお聞きしていました。一方で、いわゆる「先見的であること、そうした積極性みたいなものが、ここ最近元気がない」というお話もありました。そのあたりの元気が出る仕組みも、今後必要かと思いました。公共建築に求められるものとして「住民参加と居場所」がキーワードになっているように思います。建築家の乾さん、小泉さんの話を伺っていますと、余剰スペースではなく、「複

合化やデザインの中で、居場所は確保される」。そんなふうに関心強く感じたところです。「住民参加といったものが後世に残る建築に繋がっていくのだろうか」という点でも、「知恵を出し合いながら、うまくやっていると、いい建築、残る建築が作れる」のではないかな、と思います。

いろいろなご意見をいただきましたけれども、ここにいるみなさんは、横浜に「ぜひこれからも良い公共建築を作っていただきたい」という思いをお持ちです。これからも横浜らしい建築を作っていただきたいですし、私達と一緒にやれることがあれば、一緒に考えていきたいと思っております。



肥田——今日は活発なご意見ありがとうございました。今日いただいたものがヒントになります。良い建築、人々の心の支えになる公共建築を作っていきたいと思います。ありがとうございました。

山家 京子

[神奈川県立大学建築学部教授]

東京大学大学院博士課程修了、博士（工学）。専門は都市計画、まちづくり。主な著書に『横浜建築』（共著、御茶の水書房、2021）、『アジアのまち再生』（共著、鹿島出版会、2017）、『建築・都市計画のための調査・分析方法 [改訂版]』（共著、井上書院、2012）など。

小泉 雅生

[建築家/東京都立大学大学院教授/
小泉アトリエ主宰]

東京大学大学院在学中にシーラカンスを共同設立。同大学院修士課程修了。主な作品に、「象の鼻パーク/テラス」（第14回環境・設備デザイン賞最優秀賞）、「港南区総合庁舎」（第21回JIA環境建築賞優秀賞）など。主な著書に『環境建築私論』（建築技術、2021）など。

乾 久美子

[建築家/横浜国立大学教授/乾久美子建築設計事務所主宰]

東京藝術大学美術学部建築科卒業、イェール大学大学院建築学部修了。主な作品に「延岡駅周辺整備プロジェクト延岡駅前複合施設エンクロス」（2020年日本建築学会賞(作品)など）、「宮島口旅客ターミナル」（2021年第13回JIA中国建築大賞2021一般建築部門奨励賞）など。

五十嵐 太郎

[建築史・建築批評家/東北大学大学院教授]
東京大学大学院修士課程修了。博士（工学）。あいちトリエンナーレ2013芸術監督、第11回ヴェネチア・ビエンナーレ建築展日本館コミッショナーを務める。「インポッシブル・アーキテクチャー」などの展覧会を監修。『誰のための排除アート?』（岩波書店、2022）ほか著書多数。

肥田 雄三

[横浜市建築局公共建築部長]

平成5年度入庁。横浜市風力発電事業（ハマウイング）や、3区（南区、金沢区、港南区）庁舎の建替事業、市民病院再整備事業を担当後、建築局営繕企画課長を経て令和3年度から現職。



よこはま建築ひろばシンポジウム「これまでも、これからも、横浜らしく」動画

よこはま建築ひろば

こどもワークショップ・関連イベント

144

第4章
100周年事業

令和4年11月12日(土)、横浜市役所1階アトリウムをメイン会場に、「よこはま建築ひろば こどもワークショップ」を開催し、関連イベントと合わせて、延べ約3,400名の方にご参加いただきました。

当日は、子どもたちが建築に親しむきっかけづくりを目的とした「こどもワークショップ」に加え、市役所内部や周辺の公共建築を巡るデジタルスタンプラリー、横浜市開港記念会館の改修工事現場見学会、市役所最上階にあるレセプションルームの特別開放、ガス・電気設備の歴史に関する展示など、様々な関連イベントを開催しました。

ワークショップの参加者からは「建築に興味があった」「普段体験できないことができて楽しかった」という声をいただくなど、多くの団体・企業等のご協力のもと、多くの方に建築に触れ、学び、楽しんでいただけるイベントとなり、大盛況のうちに終わることができました。



よこはま建築ひろば こどもワークショップ 折り紙建築ワークショップ



切り込みが入った一枚の紙を折り、建物に変身させるワークショップです。折り紙建築家の茶谷 亜矢氏のご指導のもと、横浜市の代表的な公共建築物である横浜市役所及び横浜市開港記念会館を題材に、小学3～6年生の子どもたちが“紙が立体になる不思議”を体験しました。

集中力が必要な細かい作業でしたが、「難しかったけど楽しむことが出来た」、「達成感があった」という声をいただきました。

出展	公益財団法人 横浜市建築保全公社
講師	茶谷 亜矢 氏 [折り紙建築家/ 有限会社オリガミックアーキテクチャー代表]
対象年齢	小学3～6年生
タイムテーブル	① 10:00～、② 12:30～、③ 14:30～
参加者数	47人 (3回合計)

工作！お家で使える延長コード作り



建物の中には、見えないところに電気配線が広がっています。お家で使える100Vの延長コード作りを、小学生の子どもたちが保護者の方と一緒に体験しました。ドライバーを握り、一生懸命に部品を組立て、最後に電球をつないでテストを行いました。電球が無事に点灯すると、喜ぶ子どもたちの顔が見られました。

「コンセントの中身を初め見た」「貴重な体験ができた」という言葉とともに多くの子どもたちが楽しみました。



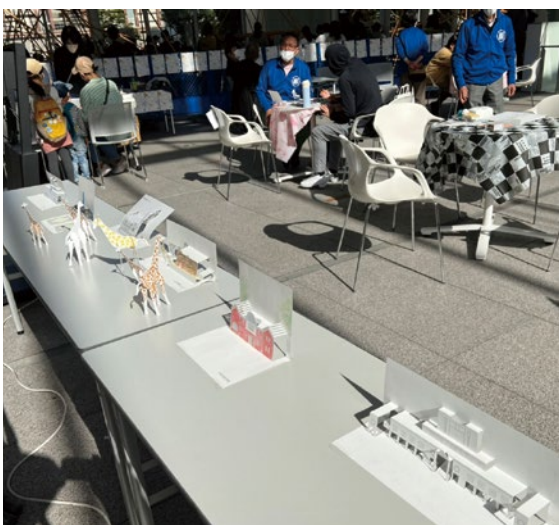
出展 一般社団法人 横浜市電設協会

対象年齢 小学1～6年生

タイムテーブル ① 10:00～、② 11:30～、
③ 13:00～、④ 14:30～

参加者数 91人(4回合計)

よこはま建築ひろば こどもワークショップ とび出す建物に色をぬろう



横浜市役所、横浜赤レンガ倉庫、大佛次郎記念会館、横浜美術館、横浜市開港記念会館、麒麟舎（よこはま動物園ズーラシア）が描かれている紙に、自由に色を塗るワークショップです。紙には切込みが入っていて、折るとあら不思議！建物を立てて飾ることもできます。

子どもたちからは、「楽しかった」「建築士の道にいきたい」という声も出るなど、建築に興味を持つきっかけとなるようなイベントになりました。

出展	一般社団法人 神奈川県建築士事務所協会 横浜支部
対象年齢	3歳～小学3年生
タイムテーブル	10:00～15:30（随時受付）
参加者数	170人



空間ワークショップ



グループで協力して、2種類の木の角材とジャンボ輪ゴムで家を建築していくワークショップです。

「強い構造を作るにはどうすれば良いのか」「どんな空間にしたいのか」等を考えながら、仲間と一つの家を建てる体験を行い、建てたあとは全員で解体・片付けをしました。

「家の作り方がわかった」「協力してできて良かった。友達ができた」という感想をいただくなど、実りあるワークショップとなりました。



出展	公益社団法人 日本建築家協会 JIA 神奈川
対象年齢	小学4年生～中学3年生
タイムテーブル	① 10:00～、② 13:00～
参加者数	52人(2回合計)



間伐材で作るオリジナルコースター



2004年から山梨県道志村の水源林を中心に間伐活動を行っている団体に参加いただきました。間伐材を市内の公共建築に供給していただいた実績もあります。

ワークショップでは、子どもたちが自らつくるをテーマに、自ら丸太をのこぎりで切り、木の実で飾り付けたり、色を塗ったり、創意工夫が詰まったたくさんの作品が出来上がりました。「初めての体験だったけど、面白かった」などの感想をいただきました。

出展	道志間伐材活用横浜 サポート隊 <small>どき</small> 道っ木い〜ず
対象年齢	4歳～小学6年生
タイムテーブル	① 10:00～、② 11:00～、③ 13:00～、 ④ 14:00～、⑤ 15:00～
参加者数	50人 (5回合計)

建設重機・機械工具 体験会



150

第4章
100周年事業

建設工事に欠かせない、重機や手押し輪車に触れることができるワークショップです。重機コーナーでは、めったにお目にかかれないコンパクトトラックローダーへの乗車体験や記念撮影を行いました。また、手押し輪車コーナーでは、曲がりくねったコースでボールを運び、タイムを競いました。

「重機に乗れて思い出になった」「ボール運びが楽しかった」という声とともに、多くの子どもたちが、普段は出来ない体験を楽しみました。



出展	横浜建設業青年会
対象年齢	小学1～6年生
タイムテーブル	10:00～16:00 (随時受付)
参加者数	294人

関連イベント

デジタルスタンプラリー



記念品 (左からカトラリー、エコバッグ、マグカップ)

スマートフォンを使用したデジタルスタンプラリーを実施しました。

市役所内のみを巡る「市庁舎コース」と、市役所周辺の公共建築を巡る「公共建築コース」の2つを用意。参加者は二次元コードから専用ウェブサイトにアクセスし、各施設に設置されたクイズに答えてスタンプをゲットします。スタンプを集めた方には100周年ロゴを印刷した記念品を配布しました。



協力	神奈川県官公庁営繕協議会
参加者数	639名
対象施設	横浜市役所、横浜人形の家、旧第一銀行横浜支店、象の鼻テラス、横浜マリンタワー、THE BAYS、横浜税関、横浜港大さん橋国際客船ターミナル、関内ホール

工事現場見学会「横浜市開港記念会館」



「文化財の維持保全」のために長期休館を伴う改修工事中の「横浜市開港記念会館」で、一般向けの工事現場見学会を実施し、子どもから大人まで幅広い年代の方々に、ご参加いただきました。

冒頭で、開港記念会館の歴史や工事内容を説明し、その後、工事期間中にしか見ることができない「壁の漆喰塗り」や「表面仕上げを撤去した後のレンガ造の壁部分」等を紹介しました。

協力 清水建設株式会社

タイムテーブル ① 10:00～、② 11:30～、
③ 13:30～、④ 15:00～

参加者数 58人(4回合計)

関連イベント

31階からの 景色を見よう

国内外からの賓客のおもてなしや、表彰式などの様々な記念行事に活用している31階レセプションルームを一般開放し、周辺の眺望を楽しんでいただくとともに、模型や動画を活用して市庁舎建設時の紹介等を行いました。



ナゾ解き！ よこはま市役所 アドベンチャー

主催：総務局管理課

市役所館内周遊企画として、謎解きイベントを実施しました。当日は、市役所1階にて、来場者へ謎解き冊子を合計865枚配布しました。館内各所で謎解きを楽しむ方が見られ、市役所の賑わい創出に繋げることができました。

ガス・電気設備展示

出展：東京ガスネットワーク株式会社、
東京電力パワーグリッド株式会社、
東京電力エナジーパートナー株式会社

共創フロントで公募を行い、3社と連携してガス設備・電気設備の展示を行いました。100年前に使用されていた貴重なガス・電気メーター、配管・配線、ガス灯や白黒テレビ等、歴史ある設備の展示に加えて、最新の設備展示を行いました。



横浜市こどもの美術展2022



「横浜市こどもの美術展2022」の展示風景 (Photo:Ken KATO)

「たてもの」をテーマに 子どもたちの絵画作品を募集

「横浜市こどもの美術展」は、毎年、子どもたちの絵画作品を募集し、賞を設けずに応募した全ての作品を展示しています。2022年は「自由テーマ部門」に加え、「横浜市公共建築100周年事業」の連携プログラムとして「たてもの」をテーマに開催されました。10日間の会期中、子どもたちが自由な発想でのびのびと描いた作品が並び、ご家族づれを中心に多くの方でにぎわいました。

主催	横浜市民ギャラリー
会期	令和4年7月22日(金)～7月31日(日)
会場	横浜市民ギャラリー 展示室1～3
出展点数	たてもの部門221点、自由テーマ部門126点 合計347点



こどもの絵画作品 LEDビジョン投影

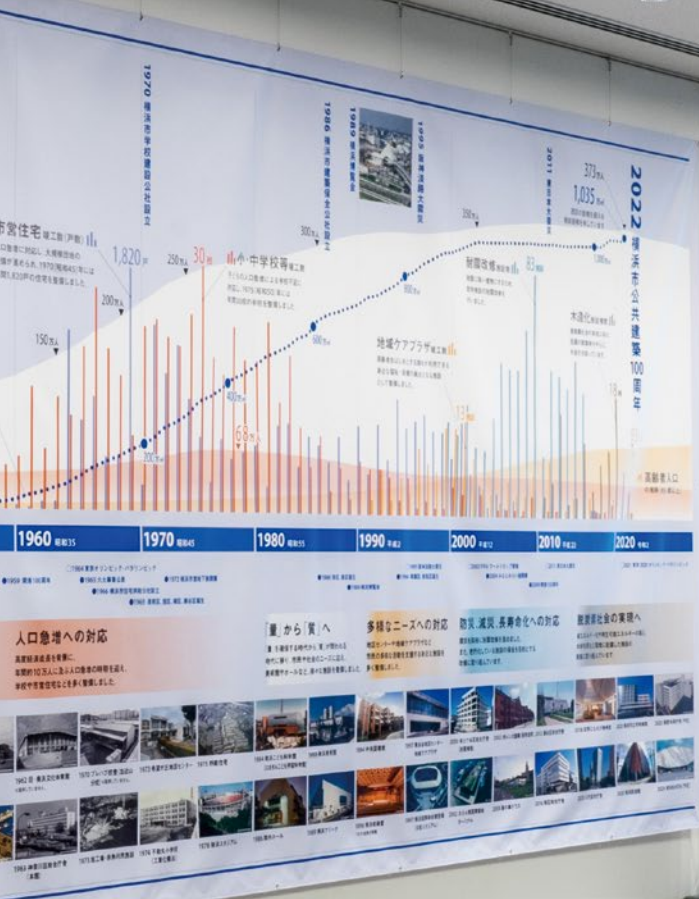


こどもの絵画作品LED ビジョン投影風景

横浜市民ギャラリーと連携し、 子どもたちの作品219点を投影

アトリウムの大型LED ビジョンに「横浜市こどもの美術展2022」の応募作品のうち、「たても」部門の219点(0歳~小学校6年生)を映し出しました。会場では、大画面に投影された作品を背景に、多くの子どもたちや家族が写真を撮っていました。





公共建築物紹介

公共建築物の紹介と事例

1. 公共建築物の種類
 2. 公共建築物の役割
 3. 公共建築物の設計
 4. 公共建築物の施工

事例紹介

1. 公共建築物の事例
 2. 公共建築物の事例
 3. 公共建築物の事例

公共建築物の設計

公共建築物の設計の重要性

1. 公共建築物の設計の重要性
 2. 公共建築物の設計の重要性
 3. 公共建築物の設計の重要性

事例紹介

1. 公共建築物の事例
 2. 公共建築物の事例
 3. 公共建築物の事例

人口急増への対応

人口急増への対応策

1. 人口急増への対応策
 2. 人口急増への対応策
 3. 人口急増への対応策

事例紹介

1. 人口急増への事例
 2. 人口急増への事例
 3. 人口急増への事例

公共建築物の設計

公共建築物の設計の重要性

1. 公共建築物の設計の重要性
 2. 公共建築物の設計の重要性
 3. 公共建築物の設計の重要性

事例紹介

1. 公共建築物の事例
 2. 公共建築物の事例
 3. 公共建築物の事例

学校建替え工事 出前授業

[都岡小学校] 設計者：八板建築設計事務所／施工者：小俣・サクラ建設共同企業体
説明及び現場見学：令和4年11月15日（4～6年生） 施工体験：令和4年11月28日（6年生）

[汐見台小学校] 設計者：株式会社アーキシップスタジオ／施工者：戸田・京急・土志田建設共同企業体
説明、現場見学及び施工体験：令和5年2月14日（6年生）

学校建替え工事の現場で、児童に建築の魅力
伝え、建設に興味を持ってもらうとともに、来年度
から供用する新しい学校に愛着を持ってもらうた
めに、在校生を対象に「出前授業」を実施しました。

都岡小学校



汐見台小学校



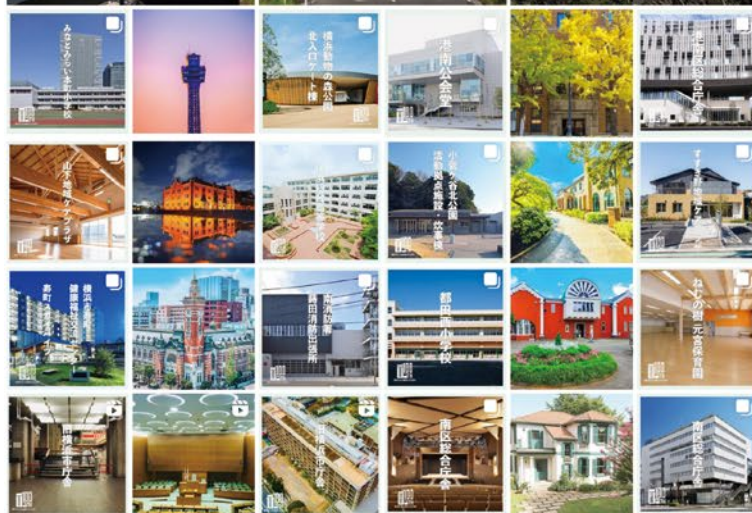
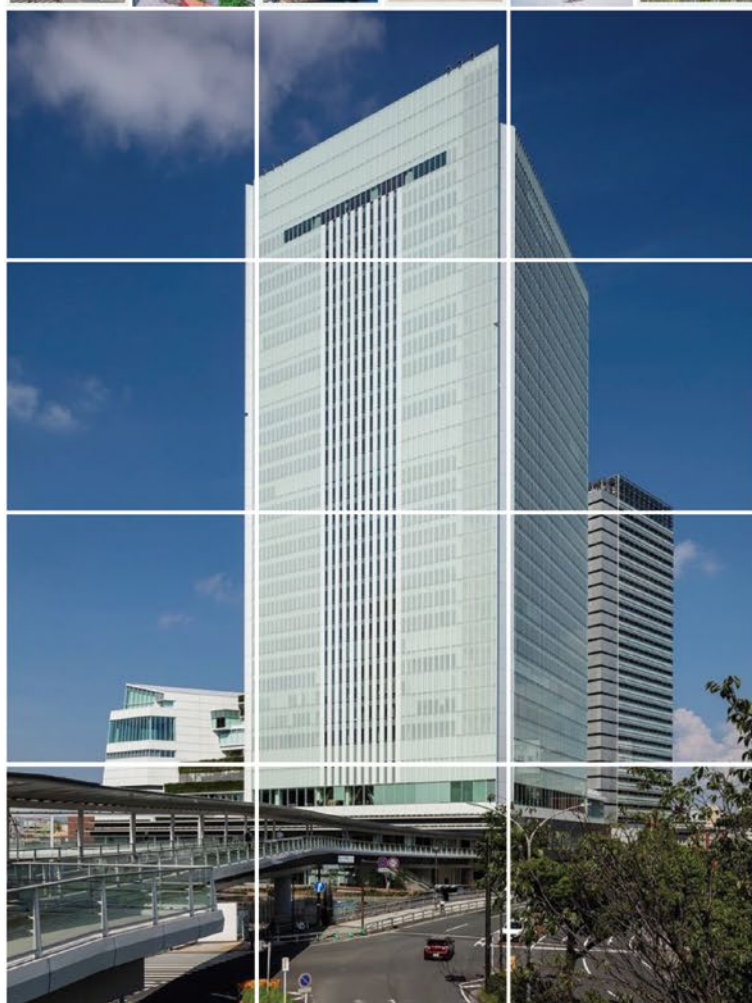
Instagram



「横浜市の公共建築の魅力発信」をテーマに令和4年4月1日からInstagramを開始しました。

工事完了時に撮影した公共建築物の完成写真に、設計意図を添えて紹介しています。

また、「#横浜公共建築」を使ってユーザー投稿を呼びかけ、魅力的な投稿を定期的にリポストし、横浜市の公共建築の魅力を発信しています。



Instagramアカウント
@yokohama_
kokyokenchiku

よこはま建築フォトコンテスト



公共建築の魅力発信のため Instagramを活用

公共建築の魅力を発信するためにInstagramの#(ハッシュタグ)を活用した「よこはま建築フォトコンテスト」を実施しました。

様々な横浜市内の建築物をおさめた816点の応募の中から、ゲスト審査員、建築局、建築保全公社の審査により、入賞作品全15点を選出しました。

ゲスト審査員



森 日出夫
[写真家]

横浜市生まれ。JPS（日本写真家協会）所属。長年撮り続けた横浜の港・街・人を「森の観測」と名づけ、独自の感性で森の「記憶」を記録する。ニューヨーク ADC MERIT AWARD 受賞。第50回横浜文化奨励賞受賞。写真集「YOKOHAMA PASS ハマのメリーさん」刊行。写真集「SCENERY of Yokohama」1~3刊行 他。

スケジュール

募集期間 令和4年11月11日～令和5年1月10日
結果発表 令和5年2月22日
市役所展示 令和5年3月4日～3月31日

募集テーマ

「これまでも、これからも、横浜らしく」をテーマに、横浜市内のおすすめの建築物、思い出の建築物、これからも大切にしたい建築物など、応募者が思う「横浜らしい建築物」をおさめた写真を募集

応募状況

作品数 816点
投稿数 532投稿
建物数 144種類

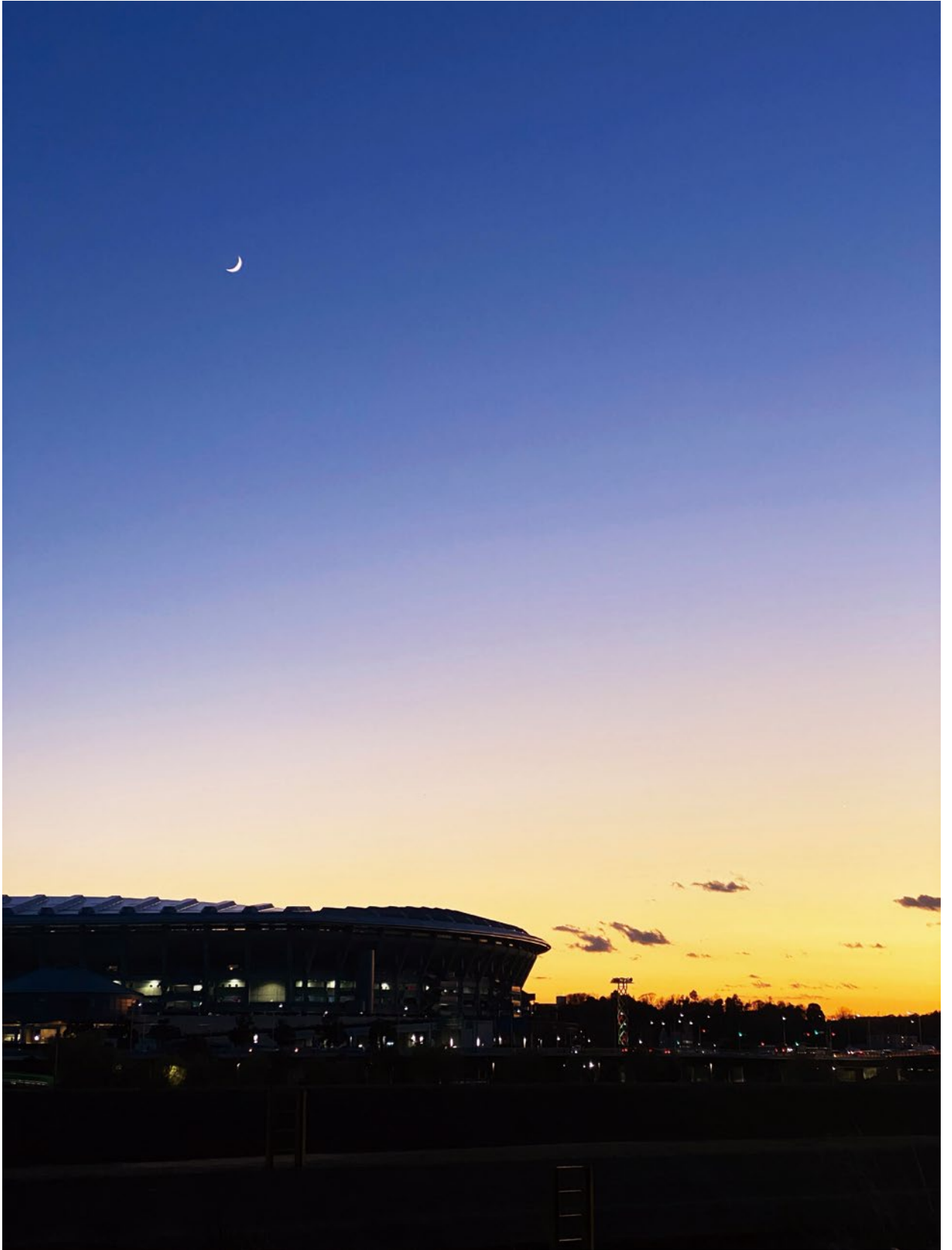
市役所での作品展示

● 最優秀賞・優秀賞展示

「横浜市公式インスタグラム写真展」で展示しました。
[展示期間] 令和5年3月4日(土)～3月24日(金)
[展示場所] 横浜市役所2階 展示スペース

● 入賞作品展示

多くの方に横浜の建築物の魅力を発信するため、入賞作品の展示と、応募作品をサイネージで投影しました。
[展示期間] 令和5年3月25日(土)～3月31日(金)
[展示場所] 横浜市役所1階 展示スペースA



最優秀賞

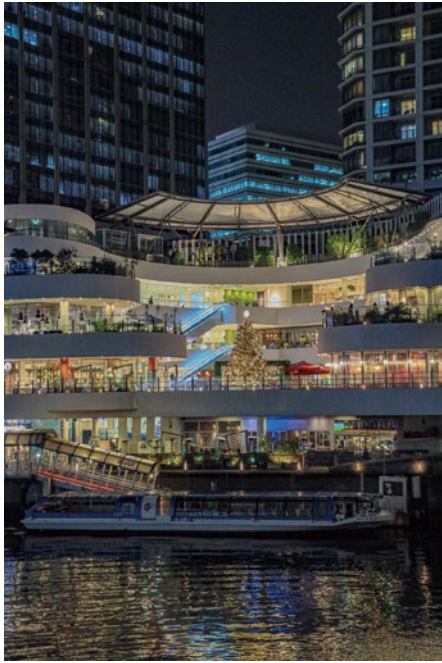
日産スタジアム

日産スタジアムと月

@campione_siena

審査員コメント：太陽が沈み夕陽がスタジアムの上部にディテールを残したシルエットが美しい。広い空の中にスタジアムの存在感が確かにあり、頭上の月も絶妙なタイミングである。

優秀賞



横浜ベイクォーター
横浜ウエーブ
@_toki_photograph

審査員コメント：豪華客船が港に着岸しているような絵で、背景のマンションと重なってふと海外の風景のような錯覚を覚える。シーバスも入り良いシャッターチャンスである。

審査員コメント：横浜市民にはもう馴染みの場所となった場所だが、さくらみらい橋にも映っているスローシャッターの軌跡が上手く活かされ、バランスの良い作品となっている。

横浜市役所
願いを込めて
@kadoyokohama2



建築局長賞

旧根岸競馬場一等馬見所 **夕暮れの根岸競馬場跡**

@roshi_1010

建築局長コメント：今は無き競馬場の喧騒と、遠くに見える高層建築物の対比が歴史を感じさせる作品。夕日と雲の流れも相まって時代の流れを想起させ、より建物の深みが増している。



建築保全公社理事長賞



横浜ランドマークタワー **横浜みなとみらい21**

@jourey_me__

建築保全公社理事長コメント：ランドマークタワーだけでなく、市役所、赤レンガ倉庫、大さん橋、遠くには横浜港シンボルタワーなど横浜を代表する建築がまるで宝石のように散りばめられ、普段は見ることのできない特別な横浜を表現した作品である。

佳作

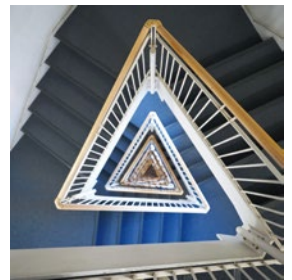


赤レンガ倉庫
秋の赤レンガ倉庫
@ayane_cantable

横浜マリンタワー
大さん橋ふ頭ビル
雨後-黎明
@efs1855mm

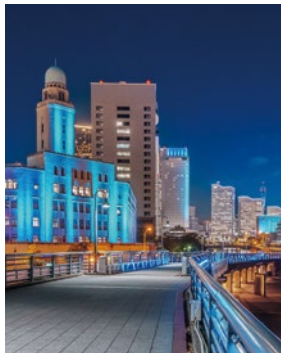


赤レンガ倉庫
チルリたいときにおすすめな場所
@gen.kenchiku



横浜市中心図書館
知の螺旋
@k_rush_hour

横浜税関
夜の散歩道
@lovelynoel283



三溪園 臨春閣
美しい秋空と日本家屋
@m_mintrose



ザ・カハラ・ホテル
& リゾート 横浜
透過
@sa_a_10



横浜開港資料館
彩りの歴史~Yokohama
Archives of History
@oboh_0202new



ホテルニューグランド
銀杏が良く似合う
ホテルニューグランド
@yoshirou.46

旧根岸競馬場一等馬見所
未来のミライの丘
@tomofuminagayama

